

青年海外派遣事業参加者感想文（一部）

1. イギリス英語研修&ボランティア体験 14日間 【30代、男性】

今回の語学研修&ホームステイは、その国の表面的な観光地巡りだけで終わってしまいがちな一般的な海外旅行とは異なり、ホームステイを通じその国に住む人の考え方や生活習慣、文化に深く触れることができ、貴重な体験だった。

私にとって初めてのホームステイ。ホストファミリーは優しいお父さんとお母さんであり、私を暖かく歓迎してくれたからだった。ホストファミリーとの会話は、片言でめちゃくちゃな文法な英語であるにも関わらず真剣に話を聞いてくれて嬉しかった。新幹線、お笑い芸人、日本の企業についてなど色々な話しをすることができ、とても楽しかった。特に印象的だった話が、イギリス人と日本人の両国に対するイメージの違いだった。イギリス人の持つ日本のイメージは、アメリカに次ぐ経済大国として豊かなイメージがあるせいか、日本にホームレスはいないと考えていた。また、日本の企業にとっても好印象を持っていた。逆に、日本人の持つイギリスのイメージは紳士的な国だと言ったらそれは違うと真っ向から否定された。この時、距離的な理由もあるが取り上げられるニュースや学んだ知識が少なく勝手なイメージが出来上がってしまっているように思えた。

学校のクラスは、英語を母国語としない色々な国の学生が共に英語を学び、そして英語を使い会話していた。このことがとても新鮮で楽しかった。授業では、文法を学習したが、先生の話聞くだけでなく、ペアワークやグループワークがあり会話力が必要であった。他の国の生徒は、積極的に質問よくしゃべっていた。こうした姿勢が、彼らと私の英語力の違いなのだろうと思った。家でも学校でもJapan Nightでも、私の英語力の低さにがっかりした。文法はまだしも、語彙を知っていれば多くの話題について、そして濃い話ができさらに仲良くなれたのではないかと後悔が残る。

ここには書ききれないさまざまな経験をすることができ、大変有意義な2週間を過ごすことができた。そして、私の持つ価値観や世界観が広がったと思う。

2. カナダ英語研修&ボランティア体験 14日間 【20代、女性】

今回の研修は私にとって、自分を見つめ直す良いきっかけとなった。ビクトリアの街並みは古風さと自然が共存しており、お年寄りでも住みやすい街という印象だった。一面に広がるオーシャンビューと、人々の心の温かさに癒されながら、有意義な2週間を過ごすことができた。

ビクトリアでは、バスに乗るときに運転手さんと"Good morning!"と挨拶を交わし、降りるときは"Thank you!"と言葉を交わす。また、スーパーマーケットやデパートでも、親しげに"Have a nice day!"と挨拶を交わす。こういった日常のコミュニケーションは、簡単で当たり前のようだが、日本のビジネス街ではな

かなか見られない光景だと思う。ビクトリアの人々の親切で心温まる振る舞いや挨拶を見て、忘れかけていた大切な習慣を意識することができた。

ホストファザーのMikeの職業はプログラマー。私がいつも17時頃に学校から帰宅すると、すでに仕事を終えて帰宅していることが多かった。Mikeは帰宅してから寝るまで、ホストマザーと一緒にかわいい3人娘の子守をする。家族で”I love you.”という言葉を交わし、家庭愛がとても伝わってきた。家の中は家族の写真がたくさん飾られていた。ホストマザーは「子供を誇りに思っているからたくさん飾っているの。」と笑顔で言っていた。家族を愛する気持ちに感動した。日本の家庭の中には、毎日遅くまで残業して子供と接したくても残念ながら接する時間が少ない親も多いと思う。私のホストファミリーは家族で過ごす時間を、生活の中で一番大切にしている、理想的な家庭だった。

今回の研修で英語はもちろん勉強になったが、ホストファミリーをはじめ、学校の皆、街の人々に、生きていく上で大切なことを改めて実感させてもらった。挨拶から始まるコミュニケーション、家族や相手を大切に思う気持ち、これらは、どこの国でも自然であり大切なことだと強く感じた。

3. カンボジア負の遺産も丸ごと体験&高床式ホームステイ 10日間 【20代、女性】

今しかできない！そう思い、悩みに悩んで参加した10日間。無理を言って仕事も休ませてもらいました。本当に今参加してよかった、とこの10日間を振り返って感じます。

「カンボジアの子供達は、働き者だ」観光地、村、道を歩いているだけでも、子供達が働いている姿が目につきます。観光地では、一人の働き手としてお土産を売っていたり、船を動かしたり…。また村では、井戸の水汲みから牛追い、小さな弟・妹の世話まで、多くの仕事を手伝っています。あんなに重い物を、肩にかついで、身長より大きな自転車の荷台に兄弟を乗せて、でも、彼らは嫌々しているという素振りも見せず、当然の様に働いています。「カンボジアでは当たり前」そう言われるかもしれませんが、彼らのそんな姿からは、貧しさよりも力強さとたくましさを感じました。

「子供達は、遊び上手だ」木の葉・木の切れ端・花の蜜・風船の切れ端だって、彼らにとっては全てが立派な遊び道具です。日本で言う「おもちゃ」なんてしろものがなくても、落ちている物、家にあるものを上手に利用して、たちまちおもちゃにしてしまいます。どんな事にも興味津々、夢中で取り組みます。服をどろんこにしながら裸足でかけまわる姿は、今の日本ではあまり見かけないせいか、とても印象に残りました。

「カンボジアの子育ては、ゆったりのんびり」私が見た村での子育ては、誰が本当の親か分からないほど、村全体で子育てをしていました。いつの間にか、近所の子が家に入ってきて、その家のお母さんが髪をとかしてあげていたり、おやつを一緒にたべたり……。そうやって地域の大人や子供同士の関係から色々なことを学び、成長しあっているんだなと感じます。カンボジアの家庭では、日本のように「早くしなさい」「そんな汚れた服で部屋にあがらないで」「手伝いしなさい」なんていう母親の怒鳴り声は、聞こえてきませ

ん。それどころか、いつも温かく見守っている家族の下で、のびのびと育っているように思いました。

「カンボジアの歴史を伝える事の大変さ」これは、カンボジアでなくてもいえることですが、特に遺跡に関しては、風化していくものを修復し、しかも形を変えずに伝えていくには、大変な努力と労力が必要なのだということを実感しました。また、ポル・ポト時代の虐殺も、ただ「むごいこと」としてだけでなく、その背景にある事実も伝えていく必要があります。そして何よりも、「カンボジア人の笑顔が素敵」だと言う事。バスの中から手を振ると、たいいていの人には笑顔で手を振り返してくれます。カンボジアは、日本に比べて貧しい国かもしれませんが、でもこの地には、今の日本や日本人が忘れた物、なくしてしまっただものがたくさんあります。

地雷・ゴミの問題・汚水等、解決しなければならない課題も目の当たりにしたこの10日間でしたが、これを機に、もう一度日本の生活について、子供について、考えるきっかけにしていきたいと強く感じました。